

**2020年度全国地域実践「実践大賞」
アピールレポート（共通・設問有り）**

応募団体名	(ふりがな) もりやませいねんだん もりやま青年団	応募部門	<input checked="" type="checkbox"/> 地域活動の部 <input type="checkbox"/> 教宣活動の部
活動名称	(ふりがな) みんなでいっしょに「もりやまのわ」 みんなで一緒に「もりやまの輪」		
活動実施日	2020 4 23 ~ 2020 6 4		
活動場所	守山市各所		
関係者数	20	参加者数	約100人
活動概要	(200字程度) 青年団活動も思うように取り組めないコロナ禍において、見た人に元気を届ける動画作成に取り組んだ。もりやま青年団員とOB、OGさんバージョンの動画を募集・編集し、その輪を県内の他市町青年団や市内のお店・企業・市役所関係の方々へも広げていった。6月に開催を予定していた主催事業を中止することとなり、代わりにコロナ禍の今だからこそ私達もりやま青年団に取り組めることは無いかと考えた結果、発案した取り組みである。		

活動期間 ※準備から活動終了までの打ち合わせやリハーサルなど活動を行った年月を時系列で記入してください。

年	月	活動内容（各別にまとめて記入）	
2020	4	コロナ感染者数増加により、毎週水曜日に行っていた青年団室でのミーティングを中止する。	
		ミーティングを対面ではなく、LINEのビデオ通話機能をりようしたオンライン形式で行う。	
		6月に開催を予定していた「Paddy Festival in MORIYAMA 2020」の中止を決定する。その代わりにコロナ禍で行える取り組みを考える。（モザイクアートなどの文化活動、手作りマスク作り、紙芝居作り、You tubeチャンネルを作って自分達の活動紹介や守山市の歴史・お店や企業紹介などの動画をアップする）	
		様々な意見が出た中で、見た人に元気を届ける動画を青年団から発信していく取り組みはどうか？という意見が出て、企画案作りを行う。	
			まずはミーティングに参加していた団員それぞれが動画を撮影し、試作として1つの動画に編集した。
			試作動画を元にもりやま青年団員とOB、OGさんに呼びかけ開始。
	5	団員、OB、OGさんバージョンの「もりやまの輪」をもりやま青年団のFacebookとinstagramに投稿。	
		他市町青年団、守山市役所、企業、お店の方々などにも動画撮影の協力を呼び掛けることを決め、リストアップを行う。電話やSNSメッセージ、メールなどで連絡し、団員で分担しながら協力依頼する。必要に応じて団員が出向いて動画撮影を行う。	
		守山市のFacebookや有線放送で「もりやまの輪」の取り組みを紹介してもらう。	
			守山市長や守山市のゆるキャラにも取り組みに協力していただく。
		動画のBGMに使うため、AIさんの「ハピネス」を団員で歌って録音、撮影。	
6		多くの方にご協力いただいた「もりやまの輪」を2回に分けて、もりやま青年団SNSで投稿。	

<アピールポイント>

- ①活動の詳細を以下に自由に記載してください。文字だけでなく、写真など取り組みの様子や活動の風景なども入れても問題ありません。
- ②文字の大きさやレイアウトに指定はありません。
- ③「いつ、誰が、どこで、どのように、何を、その理由は？」の5W1Hがわかるように、できるだけ具体的に書くことを心がけてください。

■活動のきっかけ、準備期間に関すること等

2020年2月、日本でもじわじわとコロナが拡がりをみせ、たくさんのイベントを中止にする動きが始まった。そんな中、滋賀県内の青年団活動も定期大会や代議員会などといった各活動の延期が続々と決まり、私たち市町団も研究会やその他の活動の延期やミーティングの回数を減らすなど、活動の自粛ムードが広がっていく。新年度が始まり「さあ始めるぞ！」と意気込んでいた私たちとは裏腹に、コロナは本格的に日本中に拡がり、テレビをつければ、増えていく感染者と不要不急の外出を控えるように呼び掛けるニュースばかり。

ミーティングの連絡では、みんなに「団室に来てね」というメッセージを送ることさえも躊躇する。

私たちはこのまま活動を続けていていいのか？ 一体どうすればいいのだ？

東京オリンピックの延期も決まり、全く先の見通しの持てない、誰も経験したことのない事態に戸惑うばかりであった。

2020年4月16日、緊急事態宣言の対象は全都道府県に拡大され、それに伴い活動拠点の団室がある公民館は使用できず、LINEのビデオ通話でミーティングをするようになった。

【ビデオミーティング写真】



毎週水曜日のミーティングでは、当たり前のように団室に集まり、話は脱線するばかり。

何気ない話で声を出して笑ったり、誰かが持ってきたお菓子をみんなで食べて、また駄弁る。

マスクをしてきた人がいたら「風邪？」なんて聞いてみんなに会いに団室に来る団員も少なくない。

当たり前だと思っていたそんな日常が、ある日突然コロナによって奪われた。

しかし、そうした気持ちが沈むような事態の中、「こんな時だからこそ自分たちにできることは何か？」

「コロナなんかには負けるな！」と考えて前を向き、行動しようとしている他の団体を多く目にした。

毎週重なるビデオミーティングでも、“青年団だからこそ” 私たちにできることは何かみんなで意見を出し合い、「こんな時だからこそみんなで一緒に乗り越えよう」「元気の出る動画を作ろう」ということで『みんなで一緒にもりやまの輪』の企画が誕生した。

【もりやまの輪 モリセイver. URL】

<https://www.facebook.com/1560402410888445/posts/2558703937724949/>

もりやま青年団の現役団員とOBOGを含んだもりやま青年団だけの動画から始まり、市民や地域のお店や企業を巻き込んで守山市の輪を作るイメージと、守山市から今度は滋賀県全体へ「みんなで一緒に乗り越えよう」とバトンを繋げるイメージでSNSを使って呼びかけ、依頼し、動画を集めた。

【もりやまの輪①】

<https://www.facebook.com/1560402410888445/posts/2574153499513326/>

【もりやまの輪②】

<https://www.facebook.com/1560402410888445/posts/2577101462551863/>

■活動中の苦労、印象深かったこと等

感染症予防のために団室が使えなくなる事態、ビデオミーティングという初の試み、誰も経験したことのない状況に戸惑うばかりであった。また、見えない、知らない未知なものということで、新型コロナウイルス感染症に対する恐怖心が拭えない中、直接お店や企業へ動画依頼をまわれない葛藤もあった。

そんな試行錯誤の中、SNSでの呼びかけや依頼といった取り組みが、有線放送や守山市にも届き、PRさせていただく機会の獲得や、動画に守山市長が出演してくださるといったことにまで繋がった。

また、動画制作においてぶつかった壁はBGM問題だ。

SNSといった不特定多数の人の目につく場では、やはり著作権の問題が付きまとう。当初もりやま青年団だけの動画には、人気ロックバンドであるWANIMAの「やってみよう」をBGMに起用していた。

しかし、どうやらこれは著作権法に引っかかるようであった。さあ、どうしよう？

動画において、人が発する言葉のメッセージがメインであるが、そのメッセージをより引き立たせて「元気の出る動画」を作るためにはBGMはとても大きい役割を果たす。

アーティストが歌う曲をそのまま使えない状況で3つの候補が出た。

①動画編集アプリの付属BGMを使う。

②愛ラブ守山という守山市内の中学生が作詞、作曲した曲を起用する。

③もりやま青年団で歌うor演奏する。

投票の結果、圧倒的多数で自分たちで歌おうということになった。

歌った曲はAIさんの「ハピネス」

この曲から感じられる「嫌なニュースだけじゃない、笑っていよう。」というメッセージがこのコロナをみんなで乗り越える今の状況にぴったりであった。

コロナにも配慮して、録音は野外の人のいないところでみんなで歌った。

最初はただ普通に歌っていただけであったが、次第に「もっと楽しそうに歌おう」「手拍子を入れた方がいいんじゃない?」「最初と最後もっとふざけよう」といった具合にどんどん“青年団らしさ”を付け足していった。

【ハピネス モリセイver. URL】

<https://www.facebook.com/1560402410888445/posts/2582742085321134/>

【みんなで歌った時の様子】



■活動の成果、今後の展望に関すること等

この取り組みで私達が得られた成果は2点ある。

まずは動画撮影に団員だけでなく守山市に関わる地域の方々や県内の青年団員へも協力してもらったことで、もりやま青年団の団員や活動を今まで知らなかった方にも知ってもらえたことだ。団員の友人・知人へのアプローチをしたことで普段の活動のことも知ってもらえて青年団に興味を持ってもらえたり、市内の企業・お店の方々へのアプローチでは、私達自身も今まで知らなかった地域のお店・企業を知ることが出来たし、相手にも地域で若者が活動しているんだと知って頂き応援してくださり、新たな地域とのつながりを持つことが出来たりという成果が得られた。

2つめは自分たちの活動の可能性を広げられたことだ。コロナウイルス感染拡大という誰もが今まで経験したことのない状況で、青年団活動も今まで通り行うことが出来なくなってしまったが、新たな取り組みをみんなで考え、実践することが出来た。一人一人が集まれずに離れていても、協力してアイデアを持ち寄れば活動を止めずに続けることが出来るんだという自分達の自信にもなった。この取り組みに多くの方々協力して下さったことや、励ましの言葉を掛けて頂いたことから、地域で活動する若者が必要とされていることを実感できた。

もりやま青年団では主催事業のマンネリ化が課題となっているが、今回の取り組みは新たなもりやま青年団を作る大切なものだったと思う。「もりやまの輪」を通じてつながりを深められた方々や団員の気持ちを大切にして、どんどん新しいことにチャレンジしていきたい。

■自由記述欄（各欄で記載できなかったこと等）

この取り組みでは団内の変化もあった。普段なかなか参加してもらえていなかった団員や、普段遠慮する気持ちから声を掛けづらかったOB、OGさんとのつながりも深めることが出来た。あまり参加してもらえていなかった団員は、企画案を提案し取り組みの輪を自分達以外へも広げようとしているときに、積極的に動画撮影の協力を呼び掛けてくれた。普段市役所で働く彼女は、職場の課の垣根を越えて声を掛けてくれた。そのおかげもあって市役所関係の方には40人ほどご協力頂くことが出来た。積極的に声を掛けていく姿に、団のみんなも一緒に頑張ろうという気持ちになった。

OB、OGさんに関しては、「コロナ禍においても出来ることを考えて活動してくれてありがとう」という言葉を掛けてもらったり、楽しい気持ちになる動画を送ってもらったりして、困ったときは遠慮せずに声を掛ければ快く協力してもらえるんだと実感した。

以上